

## イザヤ22章12-14節 「恐れと言う賜物」

### 1A 泣いて祈る 12

1B 主から来る恐怖 5

2B 執り成しとしての嘆き 4

3B 自分自身の嘆き 7

### 2A 「どうせ」の哲学 13

1B 血肉の保証 8-11

2B 「今」だけの生活 13

### 3A 赦されない罪 14

## 本文

イザヤ書 22 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、20 章まで来ました。本日の午後、21 章から 23 章までを一節ずつ読んでいきます。今朝は、22 章 12-14 節を中心に、22 章を眺めてみたいと思います。12-14 節を読みます。「12 その日、万軍の神、主は、「泣け。悲しめ。頭を丸めて、荒布をまとえ。」と呼びかけられたのに、13 なんと、おまえたちは楽しみ喜び、牛を殺し、羊をほふり、肉を食らい、ぶどう酒を飲み、「飲めよ。食らえよ。どうせ、あすは死ぬのだから。」と言っている。14 そこで万軍の主は、私の耳を開かれた。「この罪は、おまえたちが死ぬまでは決して赦されない。」と、万軍の神、主は仰せられた。」

主が、泣いて悲しみなさい、という言葉をかけておられます。その泣き悲しみ、嘆きを主なる神の前で行うことなく、むしろその切実さを避けて、今、楽しんで喜ぼうではないか、という言葉で応答しているユダの民の姿がここに描かれています。

私たち日本人は、武士道のような教育をずっと受けてきました。それは、「感情を表現することは、はしたない。」という教育です。すぐ隣にいる人に迷惑をかけないようにするため、感情を押し殺すように教えられています。こんなことを言っている私も、やはり自分の感情は抑えるようにします。しかし、聖書の神はとても感情豊かな方です。そして私たちも、神のかたちに造られた人間であり、神さまに造られた目的に生きるなら、その感情は、どれ一つそれ自体は悪くありません。今朝の説教題に「恐れという賜物」と書いてあるのに、驚かれたかもしれません。恐れがまさか、神からの賜物だと思わないでしょう。しかし、神はこの否定的な感情さえ用いられて、私たちを生かそう、命を与えようとしておられます。

私たちが先週末、三日に渡る合計四回の、セレブレーションオブラブの伝道大会に参加しました。その中で、まだ教会にいらしたことがない方のため、その方を誘うおうとし、誘えなかった人もそのために祈りました。大会では、賛美を導く人々から、祈る牧師さんから、そして説教をする伝道者、

フランクリン・グラハムさんから、ほとぼしる神の愛を感じることができました。私たちの感情、普段使わない感情が大きく使われた感じでした。それは、疲れるかもしれませんが、けれども、主が揺り動かした疲れです。それは、いつもどんよりした曇りの天気しかしない地域に住んでいる人が、爽快な青空を見るような思いです。そのような青空が実はいつもあるのだということを知ってしまうと、心が揺らぐのです。あまりにも日常生活と、神が御心としておられる中には大きなギャップがあることに気づきます。けれども、そのギャップを埋めるのは祈りです。涙を流すほどの祈りです。

その大会の中で、ゴスペル歌手のマイケル・W・スミスさんがいました。金曜日の晩、アメリカにおられるご自分のお父様が危篤であったことを聞き、土曜朝以降の出演は全てキャンセルしました。彼のツイッターを読むと、ステージでは日本の方々に、そして自分の父に捧げる歌で、感極まっていたことを書いていました。土曜の朝に急遽アメリカに戻りましたが、お父様は既に召天していたとのこと。そして、フランクリンさん自身、日本に滞在中に、奥様との電話での会話で、奥様のおばさんが召天したということでした。

このように、私たちの日常の中に非日常が入ってきます。いつも近くにいる人々が空気のようになっていて、いざいなくなればいかに尊いものであったかに気づきます。そこで、私たちの心は揺らぎます。しかし、その感情は実は良いものなのです。それが悲しみであっても嘆きであっても、時に恐れであっても、実は良いものなのです。なぜなら、その時に祈れるからです。すべての命の源であられる神に出会うことができるからです。自分の生活の中心に、またこの世界と宇宙の中心に神が王として着座しておられることに、心を注ぎだす祈りによって気づくことができます。

## 1A 泣いて祈る 12

この本文の背景を説明しましょう。ユダの国、そしてその都エルサレムには、存続危機が迫っていました。アッシリヤが、数々のユダの町々をすでに攻略しています。アッシリヤは、ラキシユという町を攻め取りましたが、そこではユダヤ人の兵士が生きたまま串刺しにされ、皮剥ぎをされています。どんどん危機が迫ってきました。そして、今、エルサレムの町の周りに 18 万 5 千人の軍隊が取り囲んできました。指導者たちには、すでに逃げてしまった者たちもいます。しかし、逃げている時にアッシリヤ軍に捕まり、殺されています。ついに、ユダにとっての「覆い」が取り除かれた、と 8 節に書いてあります。

その時にしなければいけないことは、何でしょうか？ そうです、繰り返しますと 12 節にある、「祈り」です。それは、その脅威がなくなってほしいという祈りではありません。その祈りは当の昔にユダの人々は捧げていたことでしょう。しかし、それでもこのように脅威が切迫しました。それは「泣け。悲しめ。頭を丸めて、荒布をまとえ。」という祈りです。これは自分の罪を悔い改めよ、へりくだりなさい。主のために自分を清めなさいという呼びかけです。この種の祈りは、まだ捧げていなかったのです。

## 1B 主から来る恐怖 5

アッシリヤによる恐怖ではありますが、5節を見ますと、それは主ご自身の恐怖でもあることが書かれています。「5 なぜなら、恐慌と蹂躪と混乱の日は、万軍の神、主から来るからだ。幻の谷では、城壁の崩壊、山への叫び。」ここの三つ目の言葉、「混乱」は英語の聖書では terror すなわち、テロと訳されています。テロリズムがまさか、主ご自身から来るものであるというのは、信じがたいですね。しかし、ここにはっきりと書かれています。これは、紛れもなくアッシリヤ軍の引き起こしている恐怖です。それを神は、わたしから来ているのだと言明しているのです。

## 2B 執り成しとしての嘆き 4

なぜ、主はそのようなことをされるのでしょうか？テロリズムはもちろん悪であり、戦争も悪の現われです。戦争について、ヤコブは、「何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いがあるのでしょうか。あなたがたのからだの中で戦う欲望が原因ではありませんか。(4:1)」と言いました。欲望、貪りが戦争の原因であるとはっきりと言っています。しかし、神は戦争を積極的に用いられます。それは、悪の現われによって、むしろ、私たち自身の中にある悪を映し出すからなのです。ロイド・ジョンズという英国の説教家は、こう言いました。「神が戦争をお許しになるのは、それを通して人々が、それ以前には決してなかったほど明確に、罪の正体を見抜けるようにするためである。平時には、私たちは罪について軽く考え、人間性について楽観的な見方をいだく。だが戦争は、人間が何者であるか、何をしでかしかねない性質を内に秘めているかを暴き出す。」<sup>1</sup>人間の心が、いかに偽善に満ちているかを明らかにされるのです。

ですから、その時にこそ主に対して、涙を流して祈ることができます。偽善に満ちた心、二心を一つにしてください、泣いて祈ることができます(ヤコブ 4:8)。しかし、エルサレムの住民はそれに気づきませんでした。そのことをイザヤは嘆いています。泣き叫んでいます。22章4節をお読みください、「それで、私は言う。「私から目をそらしてくれ、私は激しく泣きたいのだ。私の民、この娘の破滅のことで、無理に私を慰めてくれるな。」」これほどまでに、主が彼らの心を揺り動かしておられるのに、彼らが気づいていないからです。

これが、主イエスが新約時代のユダヤ人たちに、そのことを行なわれたことでした。主はガリラヤから宣教の働きをされました。御国の福音を宣べ伝えられました。病人を癒され、悪霊を人々から追い出されました。その地域一帯の人々がイエス様のところにやってきました。そして、そこには力がありました。そして、そのお言葉には権威がありました。人が動く権威、その心を動かす言葉を聖霊によって主は持つておられました。そこでユダヤ人の宗教指導者は、恐れを抱いたのです。この恐れと不安は、自分ではどうにもなりません。自分たちが居座っていたユダヤ教の制度を覆すほどの震撼が走っていました。そこで彼らが行なったことは、何とかしてイエスという者の行動を抑えることでした。ローマ当局に捕えられるように仕向けることでした。自分の恐れを、何とか

---

<sup>1</sup> 「神はなぜ戦争をお許しになるのか」110頁 ロイド・ジョンズ いのちのことば社

して力で抑え込もうとしたのです。そして、ついにローマ総督ピラトにイエスを引き渡し、十字架刑に付けるように扇動したのです。彼らは、自分に与えられた心の騒ぎ、これからどうなるのかという不安を、主の前に持って行くのではなく、自分の手で抑え込もうとしてしまったのです。

主は、引き渡される数日前、オリーブ山からエルサレムの町に入られる時に、この町を見て泣きました。「ルカ 19:42-44 おまえも、もし、この日のうちに、平和のことを知っていたのなら。しかし今は、そのことがおまえの目から隠されている。やがておまえの敵が、おまえに対して壘を築き、回りを取り巻き、四方から攻め寄せ、そしておまえとその中の子どもたちを地にたたきつけ、おまえの中で、一つの石もほかの石の上に積まれたままでは残されない日が、やって来る。それはおまえが、神の訪れの時を知らなかったからだ。」イエス様によって、せつかく心の揺らぎが与えられたのに、ユダヤ人たちはそれをローマにイエスを引き渡すことによって心の平穩を取り戻そうとしたのです。自分たちのこれまでの生活を守っていたかったからです。

しかし彼らの恐れていたことがかえって、自分たちの身に降りかかりました。かつてのアッシリヤに取り囲まれるエルサレムのように、紀元 70 年にローマに包囲されて、彼らは滅ぼされ、残りは捕虜として連れて行かれることとなります。記録によれば、エルサレムの裕福な人々が住む上町に住んでいた祭司長たちは、ローマがまさか自分たちを捕え、殺すことなどないはずだと思っていました。つまり、ローマ軍がエルサレムに進んできたことも、主からのものであることを認めることができませんでした。そのローマとユダヤの戦争は、神の裁きの現われとなりました。

私たちは、今、どのような心になっているのでしょうか。イザヤと同じように他の人々が主イエス・キリストのところに行かないので、悩んでいることもあるでしょう。泣き叫びにちかい祈りになっているかもしれません。こうした悩みは、主ご自身から来たものです。イザヤが嘆き悲しんで祈っているように、主がご自身のところに引き寄せようとしておられるのに、そうしていない人々を見る時に、私たちの心は引き裂かれます。その悩みは神から来ています。キリストご自身から来ています。神の愛の現われです。

### 3B 自分自身の嘆き 7

あるいは、そこまでの心の余裕が与えられていないかもしれません。自分のことで精一杯かのかもしれません。そうであっても、大丈夫です。主はご自身のところに引き寄せようとされています。自分の心にある不安や恐れ、そこには神の御霊による聖めが待っています。私たちが、心を尽くして主を求めて、泣いても嘆いても、主の前に出ることをやめなければ、主の御心と自分の思いが一つにされていくのを感じることができるでしょう。自分が思いつきもしなかった新たな考えが与えられるかもしれません。意外な語りかけがあるかもしれません。主は、「私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施す(エペソ 3:20)」方ですから、そのように語りかけてくださるでしょう。私たちの心を御心を選び取るができるよう、掃除してくださいませ。

7 節に、「**泣け。悲しめ。頭を丸めて、荒布をまとえ。**」とあります。頭を丸めるとは、私たち日本人の頭を丸めるのとは違います。神の律法にナジル人という掟があります。主に、「私はこれこれのことで自分を捧げたい」と願った時に、ぶどうに関わる物をいっさい食べたり飲んだりしてはならない、そして髪の毛に剃刀を当ててはならない、というものでした。こうやって、自分は主のものになっているのだ、という聖別の期間を過ごすのです。それから、その期間が満ちた時は、髪の毛を剃って、動物のいけにえと一緒にその髪の毛を主に捧げます。ですから、自分の不安と主にあって戦っている中で、主は私たちをご自分のものとして聖めてくださいます。自分にはできないと思っていた主の命令も、それを行なう勇気を与えてくださいます。

## **2A 「どうせ」の哲学 13**

しかし、ユダの民、エルサレムの住民は主のところに行きませんでした。彼らの周りで起こっていること、自分たちに迫って来ているもの、これらが主からのものであるという認識はありませんでした。そうではなく、その恐れを人間的な方法で対処しようとしていました。

## **1B 血肉の保証 8-11**

8 節から 11 節までを読んでみましょう。「8 こうしてユダのおおいは除かれ、その日、おまえは森の宮殿の武器に目を向けた。9 おまえたちは、ダビデの町の破れの多いのを見て、下の池の水を集めた。10 また、エルサレムの家を数え、その家をこわして城壁を補強し、11 二重の城壁の間に貯水池を造って、古い池の水を引いた。しかし、おまえたちは、これをなされた方に目もくれず、昔からこれを計画された方を目にも留めなかった。」

8 節を読むと、彼らは包囲するアッシリヤを見て、主に向かわずに武器に目を留めたとあります。ソロモンが森の宮殿という宮殿を作りましたが、そこは武器庫となっていたのでしょうか。そして、死活的なのは水の補給です。包囲されて負けるのは、水や食料不足で持久戦に耐えられないからです。そこで、彼らは水を集めました。実はここに書いてあるものは、今のエルサレムに行けば鮮やかに遺跡として残っています。下の池、また古い池とは、ギホンの泉と呼ばれるものです。かつてエブス人も、そこから地下水道を作っていましたが、ヒゼキヤ王はさらに引き延ばして、シロアムの池まで続く地下水道を掘りました。それは驚くべきもので、今もその地下トンネルには水が流れており、旅行者が通っています。さらに、ここに家を壊して城壁を補強したともありますが、この跡も見つかっています。

これらの対処をヒゼキヤが敢行しましたが、ヒゼキヤ自身は主に抛り頼んでいました。しかし、エルサレムの住民には、「ああ、ヒゼキヤ王がこのように防備を固めているから、アッシリヤからも守られるだろう。」と思って、それでこれらのことが、主によって起こされており、主のご計画の中にあることを認めなかったのです。いかがでしょうか？これはまさしく、私たちの現代生活そのものを表しています。私たちは、便利で安全な生活を歩んでいます。しかし、そうであっても時に不安がよぎることがあります。その不安や恐れは、神から与えられた賜物です。主がそこで、「わたしが神であ



る」と語りかけておられるのです。しかし、そうこうしているうちに問題が解決します。それで、「ああ、こうやって問題が解決されているから、良かった。」として、何事もなかったかのように過ごしてしまうことができるのです。

もしかしたら、職場の人間関係、学校での関係、家族や親せきの関係で悩んでいるかもしれません。それもまた、主が与えておられる賜物です。その中で私たちの心には不安がよぎります。その時に、主の前に祈りによって来てください。主が私たちの心を清めてくださいます。そして、御心を選び取る勇気を与えてくださいます。けれども、もしその恐れを自分で支配しようとするとうなるでしょうか？すればするほど、ますますその恐れの要素は大きくなるのです。テレビ番組などで、整形手術の失敗の話が出てきますね。「これで、私は十分美しいのだろうか？」と思ってさらに手術してもらおうと、だんだん崩れていく。これは飽くまでも喩えですが、恐れを解決しようすると、ますます自分の恐れていることが近づいてきます。ですから主が、「だから、あなたはわたしのところに来なさい。」と呼びかけています。

## 2B 「今」だけの生活 13

そして 13 節をもう一度見てください。「なんと、おまえたちは楽しみ喜び、牛を殺し、羊をほふり、肉を食らい、ぶどう酒を飲み、「飲めよ。食らえよ。どうせ、あすは死ぬのだから。」と言っている。」もう武器によって、アッシリヤには対抗できないと分かった彼らは、そこで主に立ち返ることをしませんでした。そこに残されていた家畜をほふって、ぶどう酒を飲み、どうせこれらはアッシリヤの分捕り物になるのだから、自分たちが使って死のうではないか、ということです。使徒パウロは、この箇所を、復活を信じない者たちがコリントの教会にいたので、そこで引用しました。罪を捨て、悪い習慣を捨てなさい、と戒めています。今を楽しむ刹那的な生活になっていたのでしょうか。

私たちは恐怖や恐れに直面しますと、それを何とかしようとするために二つのことをします。一つは、過剰な防衛です。心は不安なので何でもかんでもそれは危険だとして過剰に自分を守ろうとします。それは、私たちの身近な生活でも起こりますし、戦争のような世界レベルにおいても起こっています。例えば、戦争において虐殺行為が行われるのは、「自分たちがどうなるか分からない」という恐れが大きな原因となっています。もう一つの反応は、自分の中に籠ることです。テロ事件が起こると、人々は委縮して自分の行動範囲を狭めようとします。海外に渡航する人が一気に減るのも、恐れのためですね。

ここでの反応、食べたり、飲んだりするのもその一環です。つまり、現実には迫って来ているものを見ないようにする。自分の目の前にあるところだけを見て、喜んで楽しむことができる空間を作る。そして、将来のことを考えないで今が良ければよいと考える。時間的にも空間的にも、心理的にも自分の範囲を狭めて、自分のことだけを考えていくようにしていく姿であります。私たちは、神の国とその義を第一に求める者として神から呼ばれています。神の国は、自分の周りに広がろうとしています。自分とは関係のない人にも及んでいます。自分が苦手としている分野にも及んでいます。

ペテロは、まだ異邦人の家に入ることさえなかったのに、主に呼ばれてコルネリオの家に入りました。新しい御霊の働きを神は絶えず行なわれようとしています。ですから、自分の周りの壁が何であるかを見つける必要があります。それを乗り越えるのは勇気が要ります。けれども、ここでも主に祈り求め、その壁を越えて外に出るのです。

### **3A 赦されない罪 14**

このようにしてエルサレムの住民の一部には、最後の最後まで主に立ち返らない者たちがいました。そこで主が宣言されたのが 14 節です。「そこで万軍の主は、私の耳を開かれた。「この罪は、おまえたちが死ぬまでは決して赦されない。」と、万軍の神、主は仰せられた。」

これが、いつまでも主に呼び求めない者たちの姿です。主がずっと、「わたしのところに来なさい。」と言われても、それを受け入れられなければいつまでも赦されないということになります。神は永遠の計画の中で、私たちの罪をお赦しになる備えを下さいました。ご自分の御子イエス・キリストです。この方によって、これまでの罪の一切切、永遠に赦すことにしました。キリストは二千年前に十字架で死なれましたが、それはその時代のイスラエルの人々のためだけでなく、これまで生きてきた人々全てのために死なれたのです。ですから、この方を拒むということは、他に赦しは残されていないということになります。「ヘブル 10:26-27 もし私たちが、真理の知識を受けて後、ことさらに罪を犯し続けるならば、罪のためのいけにえは、もはや残されていません。ただ、さばきと、逆らう人たちを焼き尽くす激しい火とを、恐れながら待つよりほかはないのです。」

私たちが自分を地獄に送る方法を、このイザヤ書の箇所で見つけます。一つは、「自分により頼む」ということです。主が手を伸ばしてくださって、アッシリヤから彼らを救ってくださろうとしているのに、武器に目を向けました。次に地下水路に目を向けました。それがだめだと分かると、「だったら今日、楽しんで喜んで暮らせばいいじゃないか。」としました。こうやって、自分の力で生きていこうとすること、これが人を地獄に向かわせます。私たちを救うのは、自分の行ないではなく、主に救っていただくこと、神からの救いです。そしてもう一つ、地獄に送る方法は、「恵みを受け入れない」ということです。神は、私たちが自分で自分を救えないことを知っておられます。だから、私たちではなく、ご自分の一方的な憐れみで、愛してくださって、それで救ってくださいます。セレブレーションオブラブでは、フランクリンさんが、「神はあなたを愛しています。」を連発していました。何度その言葉を言ったでしょうか、30 回、いや 50 回を下らないでしょう。それでも、私たちはその恵みを受け入れない頑なな心があります。その頑固さが私たちを地獄に送ります。

どうか、初めの一步を踏んでみましょう。それは、自分にある恐れや不安に向き合うことです。そして、それを主の前に持っていくことです。心を開いてください、この方を信頼してください。主は決して悪いことをしません。そして、主は恵みに拠って救ってくださいます。